

施設概要

構造・規模

敷地面積 3702.70㎡

[管理棟]

鉄骨平屋建(52.0㎡)

[旧上毛モスリン事務所] 木造瓦葺2階建(延 470.41㎡)

[田山花袋旧居]

木造茅葺平屋建(71.94㎡)

開館

昭和56(1981)年12月1日

利用案内

開館時間

午前9:00～午後5:00

(入館は午後4:30まで)

休館日

月曜日、祝日の翌日、年末年始

入館料

無料



アクセス

館林市第二資料館

〒374-0018 群馬県館林市城町2番3号 ☎0276-74-9665

URL <http://www.city.tatebayashi.gunma.jp/bunka/>

【鉄道】

東武伊勢崎線

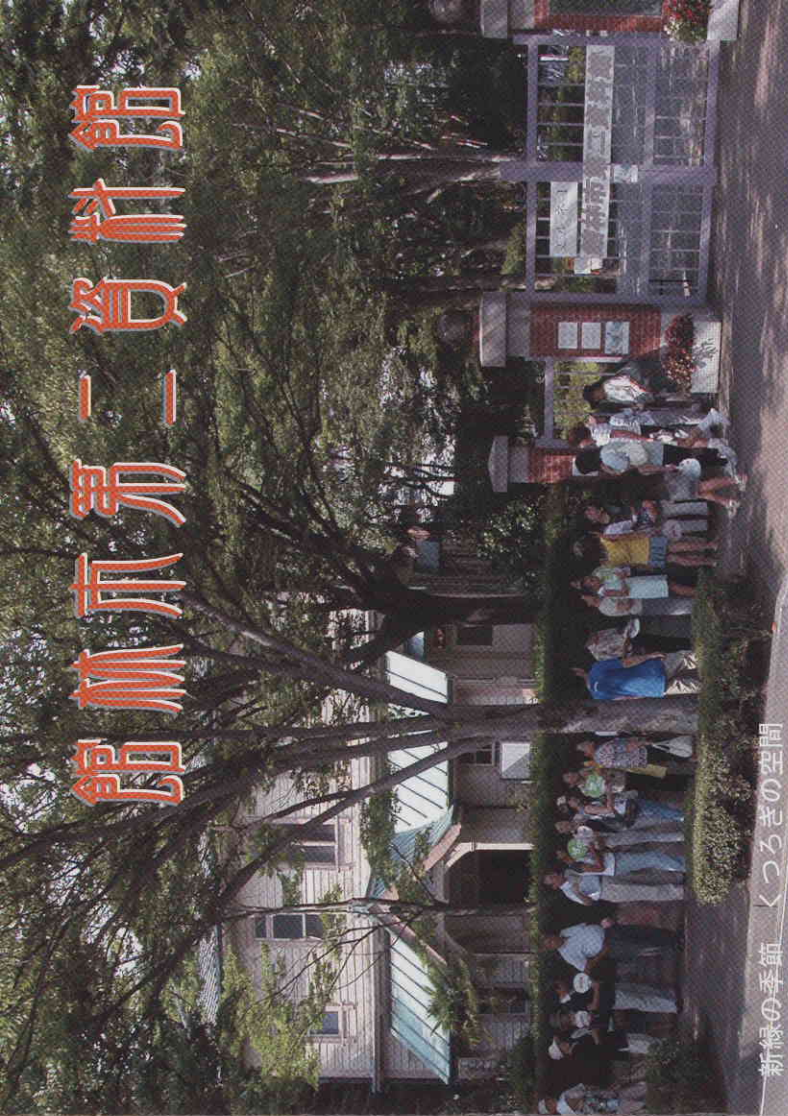
「館林駅」下車徒歩15分

【自動車】

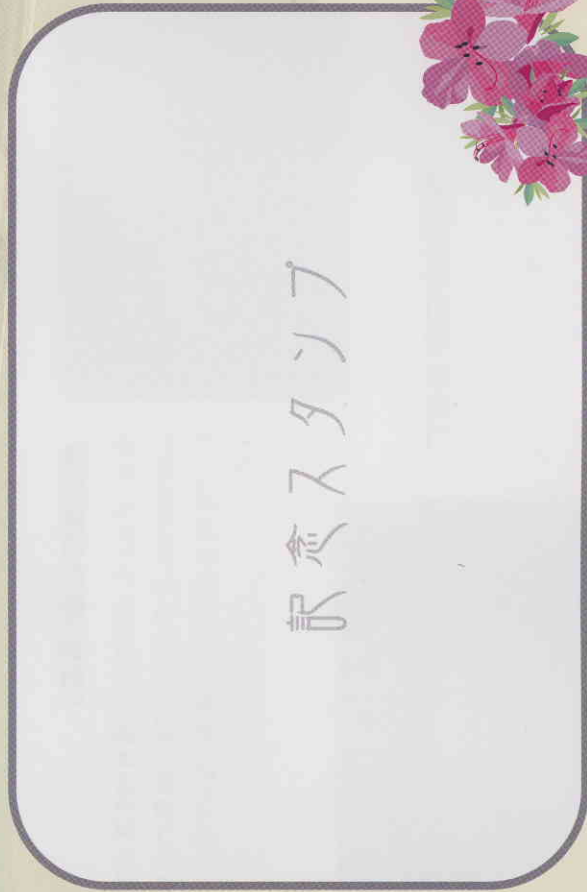
東北自動車道

「館林I.C.」から約10分

* 資料館東隣の「尾曳
駐車場」(無料)をご
利用ください



新緑の季節 ぐっさきの空間



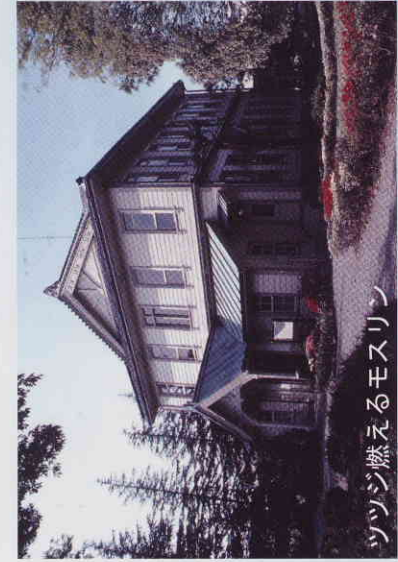
こ来館日 _____年____月____日



旧上毛モスリン事務所

田山花袋旧居

群馬県指定重要文化財[昭和53(1978)年10月13日指定]



ツツジ燃えるモスリン

この建物は、明治41(1908)年から43(1910)年にかけて建てられた上毛モスリン株式会社の本館事務所です。
上毛モスリン株式会社は明治中頃館林周辺の技術的伝統である機業を生かして設立された会社で、近代産業のひとつとして町の発展に大きな影響を与えました。

この建物の特徴は、洋風建築発達当時の技法が取り入れられていることです。日本建築の伝統である尺貫法と入母屋造りを用いる一方、内部構造は洋小屋の要素を取り入れている建物で、洋風の要素としてシンメトリー式(左右対称)の外観、張り出しの浅い屋根、上下開閉式の窓、柱・階段の手すり・天井等に見られる意匠から当時の建築技法の発展がうかがわれます。設計者、施工者とも不明です。昭和54(1979)年市役所庁舎の建設に伴って、第二資料館内に曳き移転されました。

館林市指定史跡[昭和46(1971)年5月1日指定]



花袋旧居の紅葉

この建物は、田山花袋[1871～1930]が7歳から14歳までのおよそ8年間に建て、玄関の土間に木造平屋建て、玄間の土間に続いて三畳、左手に八畳二間、右手に四畳、裏に三畳の板の間と土間の合わせて5つの部屋があります。

明治4(1871)年に旧館林藩士の子として館林に生まれた花袋は、14歳で上京。やがて小説家をめざし、明治40(1907)年『蒲団』の発表により日本の自然主義文学を確立しました。ふるさと館林と花袋のつながりは深く、特にこの家は、花袋が館林の思い出を書き綴った作品『ふる郷』(明治32年刊)に“なつかしきこの家”と記されており、花袋にとっては思い出多い家であったことがうかがえます。また、この建物は江戸時代の武家屋敷のひとつでもあります。昭和56(1981)年に市内城町より第二資料館内に解体移築されました。



館林城の石垣(角石)

角石(すみいし)とは石垣の隅角部を算木状に組み稜線を作る長方形の石です。城郭の石垣のほとんどは角石と間知石が基本となって築かれています。



館林城の石垣(間知石)

間知石(けんちいし)とは石垣の面に組み込まれている四角錐形の石です。第二資料館内のは、旧館林城二の丸および三の丸付近から出土したものです。



田山花袋の胸像

この胸像は、昭和58(1983)年5月館林市民の有志によって建てられたもので、晩年の花袋をモデルに市内の彫刻家阿部光住氏が創作しました。作品に対する自信と厳しさの中にふるさとの自然を愛した温かな花袋がしのばれます。



道標

道標とは旧街道に建てられた現在でいう道路標識です。これは寛延元(1748)年、旧小泉街道(現在の国道354号)沿いに建てられたもので「右こいづみおじま(小泉尾島)、左あかいわふっと(赤岩古戸)」と記されています。